
魔法少女リリカルなのはStrikerS 過去と現在(いま)と未来と…

ロード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 過去と現在いまと未来と…

【Nコード】

N4784Q

【作者名】

ロード

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはStrikersの二次創作小説です。本当のStrikersの物語は空港火災事件より前から始まっていた。

機動六課が設立する数年前、とある場所でのとある出会いから始まる――

過去・現在・未来を駆け抜けろ！！

原作Strikersとはまた違った物語が今、始まります。

第1話「タイプゼロ・プロト」機動六課設立11年前」(前書き)

皆様はじめまして。

今回、この小説を執筆しましたロードといいます。

久々に気合を入れて書いた作品なので皆様に気に入って頂ければ幸いです。

何分、文章力が無い中無我夢中で頑張っておりますので誤字・脱字がありましたらご報告下さい。

最後に本作品で読者の皆様が楽しんで頂けますように――

それでは「魔法少女リリカルなのはStrikers 過去と現在と未来と」始まります。

第1話「タイプゼロ・プロト」機動六課設立11年前

新暦64年

「はっ…はっ…はっ……」

とある世界――

少年は息を切らせながらも必死になって歩いていた。

肩からは血が滲み出ており、彼の白い服は赤く染まっていた。

そして靴も履かずに素足で後ろを決して振り向くことなく走り続けた。

彼の後ろでは研究所らしき建物から火の手が上がっており、時々小規模ではあるが爆発も起こっていた。
そう、彼は逃げ出して来たのだ。

毎日のように繰り返される実験――

自分の体を好き勝手にいじくり回す白衣の研究員――

壊れていく自分――

逃げ出したかったが逃げることは出来なかった。

実験が終わればポットの中に入れられてしまい【調整】が行われるのだ。

毎日これの繰り返し。

しかし、その毎日も今日終わりを迎えた。

管理局と名乗る組織が研究所に姿を現したのをきっかけに研究員は施設の破棄を決定。

研究対象であつた自分達を無き者にしようとしたのだ。

ポットに入っている自分達には何も出来ない。

研究員がボタンを押すだけで簡単に自分達は死んでしまうのだ。

少年はそれを理解出来ていた。

——君達は存在してはいけなかったのだ

刹那、その研究員はボタンを押すことなく絶命した。

何故なら……

『大丈夫でしたか？我が主』

黒い鎌を持った金髪に翡翠色の瞳を持つ女性は彼にそう呟いた。

黒いスウェットシャツに白いロングパンツ、何と言っても真紅のフットブーツが印象的だった。

『今、そこからお出しますので動かないで下さい』

女性にそう言われ少年はこくと頷いた。

次の瞬間、女性はポット目掛けて鎌を振るうとポットがいとも簡単に半分に切れた。

『さあ、行きましょう』

「…何処に…行くの？」

ポットから出された少年は女性にそう尋ねた。すると女性は少年の目線に合うようにしゃがみ微笑みながら言った。

『主は何処に行きたいですか？』

— ※ — ※ — ※ — ※ —

「はっ…はっ…はっ…うわっ!？」

『主!』

何かに躓いてしまったのか少年はバランスを崩してしまい倒れてしまった。

女性は倒れた少年に駆け寄って手を差し伸べた。

『大丈夫ですか。やはり私が…』

「…うん。自分で…歩けるから」

そうして少年は再び走り始めた。

女性はその姿を見ると不安ながらも彼の後ろを付いていった。

「ねえ、ブリュンヒルデ…」

『はい。何でしょう主？』

走りながら女性、ブリュンヒルデに声を掛ける少年に彼女は返事をした。

「彼女達は…大丈夫かな？」

『管理局の局員が何人かいましたから無事に発見されて保護されると思います』

「ならいいや」

そうして少年と彼女は自由の世界へと飛び出して行くのだった。

後日、管理局員の一人クイント・ナカジマはこの施設で実験体と思われる二人の子供を保護し養子として迎えるのだった。

その際、近くには子供達が入っていたと思われる生体ポットが三つ発見されたがもう一人の行方は分からなかった。

そして研究所に残されていた資料には衝撃的なことが書かれていた。

プロジェクトR――

正式名称はプロジェクトRosemary、花言葉で追憶・思い出を意味する。

名前からして穏やかそうに聞こえる響きだが計画は実際に違っていた。

人体を素体とした戦闘機人を中心に圧倒的な武力を展開。

その前段階としての三人の実験体。

タイプゼロ・ファースト、タイプゼロ・セカンド。

そしてタイプゼロ・プロト……

彼らの実験データを元に本格的な戦闘機人の開発計画。

最終目標は××××

（×の部分は資料が焼けてしまっていて解読不可能）

管理局はこの資料から実行犯と思われる人物、ジェイル・スカリエッティを広域指名手配者として搜索することになった。

そして保護された二人の子供、タイプゼロ・ファーストとタイプゼロ・セカンドにはそれぞれギンガとスバルの名前が付けられナカジマ家の家族として暮らすことになった。

そして少年と女性、ブリュンヒルデは……

新たな物語はまだ始まったばかりである。

第1話「タイプゼロ・プロト」機動六課設立11年前（後書き）

感想・意見がありましたら宜しく願います。

第2話「ライラック・アヴィオール」機動六課設立10年前（前書き）

早速感想を頂いたのですがプロローグとか主人公設定は確かにある
といいかな〜と思いますが自分的には作品の先入観を極力防ぐため
主人公設定についてはもう暫くしてから書きたいと思います。
プロローグはこの話、機動六課が設立されるまでが1つのプロロー
グだと思って貰っても構いません。ちょっと無理があるかな？
さて、今回も執筆頑張りましたよ〜！！

第2話「ライラック・アヴィオール」機動六課設立10年前

新暦65年

少年が研究所から逃げ出してから1年の月日が流れた。

当時の事を知っている者は殆どおらず、三人目の存在など忘れかけた頃――

【時空管理局・地上本部】

「何？もう一度言ってみろ」

「は、はい！！どうやらその少年、戦闘機人と思われませんが……」

先程行われたばかりの地上部隊の魔導師試験の結果が書かれたレポートを手にながら首都防衛隊・防衛長官であるレジアス・ゲイズは部下にそう尋ねた。

そしてレジアスの気迫に押されながらも彼の部下はその様に答えたのだ。

更に――

「彼が試験中に使用したと思われる能力は明らかにデバイスの性能・処理能力を超えており、何よりも基礎能力が同じ試験を受験したどの魔導師よりもずば抜けています。以上の事からまずそう見て間違いは無いかと」

「……」

彼の説明を聞いて無言になるレジアス。

内心、彼は焦っていた。

今から1年前、レジアスの親友であるゼスト・グランガイツ率いる首都防衛隊が戦闘機人事件を捜索中にとある研究所で実験体と思われる戦闘機人の子供二人を保護していたことを思い出した。

そして提出された報告書には三人の実験体がいたことを証明する証拠が数多く記載されていた。

当時は現場判断で破棄もしくは移動されたのではないかと確定していたがまさかこのような形で現れるとは想像もしていなかったようだ。

この事が一般世間に出回れば自分の地位も危うくなる――

その考えに辿り着いたレジアスはある決断を下したのだった。

「∴試験は合格、普通の魔導師と同等に対応しろ。ただ、奴から監視の目を離すな」

「承りました」

一礼をして早々に立ち去る部下の後ろ姿を見ながらレジアスは複雑な感情になるのだった。

（『フリージアフェアリー』の使い手、ライラック・アヴィオール。お前は本当にあの時の生き残りなのか？）

レジアスのその質問に答えるものは誰一人としていなかった。

— ※ — ※ — ※ — ※ —

「ねえブリュンヒルデ。僕のことバレたかな？」

『さて、主が頑張りすぎたこともあって否定は出来ませんね』

「うゝ、意地悪……」

場所は変わってここは地上本部・正面ロビー。

先程、地上部隊の魔導師試験を終えたばかりの試験者が結果発表を今かと待っていた。

『大丈夫ですよ、貴方の事も試験も。なんたってユーノに教えて貰ったのですから自信を持って下さい』

「そう…だね……」

そして彼、ライラック・アヴィオールもまた試験者の一人である。

銀髪の長髪で瞳は淡い青色をしており遠くから見たら女性とも間違いかねない姿をしている。

落胆する彼を横で支えているのは成人女性であるライの融合騎・ブリュンヒルデ。

二人で並んで座っているとまさに絶世の美女？の降臨の様に思えてきてしまう。

「ユーノもあれから連絡取れなくなったけど大丈夫かな？」

『きっと彼の事ですから新しい遺跡発掘にでも向かわれたのでしよう』

「この試験が合格したらお礼に行かなくっちゃね」

1年前、研究所を抜け出して力尽き倒れていたところを助けてくれ

た少年、ユーノ・スクライア。

それからというものの名前の無かった彼に名前を付けてくれたのも、勉強を教えてくれたのもユーノである。

今回、魔導師試験を受験したのもユーノの一言だった。

（ライは魔力が高いからきつと凄い魔導師になれるよ！！）

ちなみにライとはライラックだと呼びづらいからとユーノが何時の間にか呼び始めた呼び方だったりする。

『そうですね。あつ、結果が出るみたいですよ』

ブリュンヒルデがそう言うのとライは手元の受験票に目をやった。

結果は受験番号で一斉表示されるため直ぐに合否が判るようになってる。

（1341番……1341番……）

今回の試験者は全部で3000人近く――

その内、地上部隊の魔導師になれるのは100人程――

まさに険しい道のであると共に狭き門である。

「大変お待たせしました。それでは今回の地上部隊魔導師試験の合格者を発表致します」

ロビーにアナウンスが流れると先程までの騒がしさが嘘のように静かになった。

そして――番号が表示された。

(1192:1235:1279:1317:1341……あった)

「アイリス!! 僕の番号あったよ!!」

番号があったあまりの嬉しさにライはブリュンヒルデに抱きついた。

『良かったですね……でもライ？その呼び方は人前では止めて下さいと言いましたよね』

一瞬見せた笑顔を恐怖の笑顔へと変貌させたブリュンヒルデ。

彼女の本当の名前はアイリス・ブリュンヒルデ。

しかもアイリスという名前を知っているのは無論、彼女の主であるライだけである。

本人はその呼ばれ方を嫌いではないが人前で呼ばれるのが大変気に食わなかった。

「ご、ごめんねブリュンヒルデ」

『ふ……まあ、今回は見逃しますが次はありませんからね』

「気をつけます」

『さあ、局員登録に行きましょう』

「うん!!」

こうしてライは管理局員として新たな一歩を踏み出すのだった。

【時空管理局・地上本部 局員I D】

名前…ライラック・アヴィオール

出身…ミッドチルダ南部

階級…三等陸士

魔導師ランク…C

所有資格…検索能力A、情報処理S

保有武装…ブリュンヒルデ（融合騎）

第2話「ライラック・アヴィオール」機動六課設立10年前（後書き）

感想・意見お待ちしております。

第3話「アルビレオ」機動六課設立9年前（前書き）

取りあえず連続投稿はこれで暫くお休みです。

また執筆できましたら順次投稿しますのでお楽しみに！！

今回はあの出来事の直前までのお話です。

第3話「アルビレオ」機動六課設立9年前

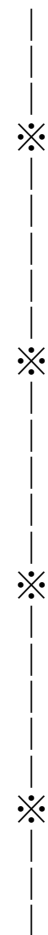
新暦66年

ライが管理局に入局してから早いもので1年が経過した。

首都防衛隊の教導官による厳しい訓練期間が終了し、一局員として働くことになった。

一局員になれば独自のデバイスの所持も可能になり扱い辛い訓練用デバイスともおさらばである。

もともとライはブリュンヒルデがいるので訓練用デバイスなど扱っていないのだが、『私が常に主の傍に居られるわけではないので』と本人たつての要望もあり渋々ながらデバイスを作ることを決めたのだ。



【地上本部・技術部メンテナンスルーム】

「失礼します」

『失礼をする』

「やぁライ、ブリュンヒルデ。頼まれていたご注文の品は完成して
るよ」

「本当ですか!？」

「ああ」

メンテナンスルームに入るなり二人に声を掛けた白衣の男性、ブリツ・アークライトは頭を掻きながらそう言った。

サボりな性格ながらも周囲からの人望はとても厚く、任された仕事は最後までやってのけるれっきとした技術者である。

現在、地上本部の局員のデバイスは彼と本局から出向で来ているもう一人の合わせて二人で面倒を見ている状態で、そのような環境下ながらもブリツツはライのデバイス製作を快く引き受けたのだ。

「基礎フレームの構築に思っていたより時間が掛かったからな。本当ならもう少し早く完成する予定だったが」

そんな彼の解説を無視しライは自身のデバイスが入っているポットの前へとやってきた。

「これが…僕のデバイス」

「そうだ。インテリジェントデバイス『アルビレオ』、それがそいつの名前だ」

「アル^{白鳥}ビレオ……新しい相棒」

その名を口にするとうわんとアルビレオが光ったように見えた。

アルビレオはコインほどの大きさに青色に白字で何かが彫ってあった。

しかし、何と書いてあるかはここからでは分からなかった。

「ライ、そいつの説明をするからこっちにこいや」

「うん」

ブリッツと呼ばれたライはポットの前を後にすると彼からデバイスについての説明を受けた。

「お前さんはもともと魔法をミッドもベルカも両方使うからデバイスもそれに合わせた。長距離攻撃のカノン、中距離のバレット、近距離のサイズ。あ……ちなみに近距離はブリュンヒルデの時と同じような癖になるよう合わせて仕上げたから違和感はそれほどないはずだ」

「ありがとうございます。それと……CVK-792の搭載は許可が下りましたか？」

CVK-792――

先の『闇の書事件』中に初めて管理局のデバイスに搭載されたのがこのCVK-792、別名ベルカ式カートリッジシステムである。

圧縮魔力を込めたカートリッジをロードすることで瞬時に爆発的な魔力を得ることができるが制御はその分難しく、使いこなせる術者とデバイスが極めて少ないのが現状である。

事件解決に導いた立役者達も事件中盤からこのシステムをデバイスに無理矢理搭載し、死と隣り合わせながらも戦い抜いたそうだ。

このシステムの存在を知ったライも自分のデバイスに組み込めないかとブリッツに無理矢理頼み込んだのだ。

「厳しかったけど何とか許可は下りたわよ。前例もあるし基礎から搭載を前提として設計すればっていう条件付だけどね」

「マリエルさん!!」

「お帰りなさい。マリー先輩」

ライの質問に答えを返したのはブリッツではなく扉から入ってきた女性、本局技術部のマリエル・アテンザだった。

彼女はベルカ式カートリッジシステムを初めて搭載させたときにデバイス整備にあたっていた人物でブリッツの先輩でもあった。

今回の話をされたとき彼はマリエルが以前、ベルカ式カートリッジシステムをデバイスに組み込ませた話を耳にしていたので相談に乗って貰ったのだ。

「レイジングハートっていうデバイスがあるんだけど、それと同じマガジン式にしたわ。弾数は6発、現状はそれ以上無理ね」

「いいえ！！搭載して貰っただけでも嬉しいです」

喜びを隠し切れないライはぴょんぴょん跳ねているがそれを見ているブリッツとマリエルはまだまだ年相応の子なんだなと思うのだった。

「それと君の身体の事なんだが……」

とあるブリッツの一言の刹那、はしゃいでいたライの目に殺気に満ち溢れた。

同時に今まで黙っていたブリュンヒルデが相棒のレグルスを展開させた。

『主の身体の事、何処まで知った？ 場合によっては……』

「いやいや！ ライをどうしようとかゆうわけじゃないから。ブリュンヒルデも武器を収めて、ライも殺気を抑えろ！！」

「あ……あ……」

突然の事に慌てながらも何とか対処しようとするブリッツと初めてこの場に居合わせたのか声もまともに出せなくなるマリエル。

二人が気にしていること――

それはライの身体が『戦闘機人』であることがバレてしまうことで

ある。

正直なところ人間として平穏な生活を送りたい二人にとって正体が知られてしまうのは絶対に避けたいことである。

「いいか、よく聞けよ！？ I S は絶対に使うな。今のお前さんでは身体が耐え切れず致命傷になるからな」

I S――

インヒューレントスキル（Inherent Skill、通称 I S）と呼ばれる先天固有技能のことで魔力とは異なるエネルギーを使用していてライは戦闘機人の為この能力を持っているのだ。

「……分かった」

『言葉の使い方には気をつけるのだな』

殺気を押さえ込むライと武器をしまうブリュンヒルデ。冷や汗を拭うブリッツに対してマリエルは固まったままだった。

「IS 『電子の妖精達』^{フリージア フェアリー} はアルビレオと相性が良すぎたんだ。急事以外には絶対になー！」

「……取りあえずデバイスは持って帰ります。再調整が必要ならまた来ます」

それだけ言い残すとライはブリュンヒルデを連れて部屋を後にした。部屋に残った二人は緊張が解けたのかその場にへなへなと座り込んだ。

「ブリッツ君、もしかして彼……」

「思っている通りですよマリー先輩。あいつもギンガやスバルと同じ戦闘機人です」

「やっぱり。じゃ、あの事件のもう一人って」

「多分ライのことでしょうね。ユーノと会った時や入局の時期とも合致します」

「この事は勿論、他言無用だよね」

「お願いします」

後日、ライが技術部に謝りに来た事は別の話である。

そして彼にも転機が訪れようとしていた。

地上部隊と本局魔導師との合同捜査任務――

P T事件・闇の書事件を解決に導いた立役者との出会い――

しかし、その時は刻一刻と迫っているのだった。

それはライが地上本部へ入局し2年目の冬であった――

時空管理局・地上本部 局員I D

【新暦66年4月1日 更新】

名前…ライラック・アヴィオール

所属／役職…時空管理局地上本部・首都防衛隊見習い
階級…二等陸士

魔導師ランク…C+

所有資格…検索能力S、情報処理S

保有武装…アルビレオ（インテリジェントデバイス）

ブリュンヒルデ（融合騎）

第3話「アルビレオ」機動六課設立9年前（後書き）

感想・意見お待ちしております。

第4話「高町なのは」機動六課設立8年前・前編」（前書き）

いよいよあのお話です。

本編でも少ししか触れられていなかったものであまり改変せず書いたつもりですが違っていたらごめんなさい。

今回は話が長くなってしまったので前編・後編で書かせて頂きます。多分、中編はないと思います（笑）

第4話「高町なのは」機動六課設立8年前・前編

ライが新しいデバイス「アルビレオ」を手に入れてから数ヶ月の時間が流れた。

一局員として仕事に熱心に取り組むその姿はまさに局員の鏡であった。

今では事件が起きる度にブリュンヒルデと共に現場へと足を運ぶのは日常茶飯事のことであり、地上本部内で彼らを知らないものはいないほど有名コンビである。

そんなある日――

「僕が本局の魔導師と一緒に捜査任務……ですか？」

「本局からの申し出でな。急遽、地上本部の魔導師の力を借りたいと言って来たからの」

ライは現在、自分が所属している部隊の部隊長に呼び出されていた。どうやら用件は本局魔導師との合同捜査任務参加の要請らしい。

「そこで私はこの部隊から君とパートナーであるブリュンヒルデに参加して貰いたいと思うのだがどうだろうか？」

「その……僕は構いませんが先輩方はそれで納得されるのでしょうか？」

「その心配はいらん。ほれ」

そう言われ部隊長が指差す方をライが見ると仲間達が皆手をこちらに振っていた。

「俺等のことは気にするな」

「せっかくの機会だから行って来いって!!」

「ライの方が何倍も役に立つと思うしね」

「帰ってきたら話、聞かせろよ」

会話からも分かるようにライは部隊の仲間からも多大な信頼を得ているその結果がこれである。

別に彼らも行きたくないわけではなく、自分達が行くよりライに行って貰うのがベストだと考えたのだろう。

そう思ったライの目には涙が滲んでいた。

「先輩達……ぐすん、ありがとうございます!!」

泣きながら彼らに向かって頭を深々と下げるライを見て一段と彼を励ます仲間達であった。

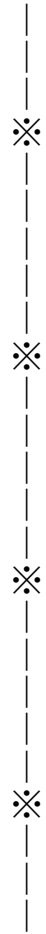
「それじゃあ決定だな。通達は後日届くと思うからな、本局の魔導師にしごかれてこいや!!」

「はい!!」

こうしてライは地上本部首都防衛隊・第41部隊の代表として合同捜査任務に参加することになったのだ。

しかし、この時既に齒車は思わぬ方向へと回り始めていたのを誰一人として知る由は無かった……

もう二度とこの部隊にライが帰ってくる事が無いなどとは――



【新暦67年・冬】

「はあゝ寒い。何で雪なんか降ってくるかな」

「冬なんだから雪の一つ二つあるだろうが」

先程まで茶色い地面と緑色の草が見えていた地面は何時の間にか降り始めた白い雪によって見えなくなるまでになっていた。

歩く度に足跡が雪の上に出来ていき、足跡の数から三人ほどが一緒に行動しているのが分かる。

そしてある管理外世界での本局魔導師・地上本部魔導師合同捜査任務中、ライはとある本局魔導師達と部隊を編成することになった。

「アホな事言っている暇があったらさっさと任務を終わらして帰ろーぜ」

そう言っって右手に持った小さなハンマーらしきデバイスを肩に当てる三つ編みの赤い可愛らしい服を着た少女はその隣にいるライへと話を振った。

「そうですね。なのはさん、エリアサーチには何か？」

『エリアサーチには特に反応ありません』

「ありがとうレイジングハート。ここも何もないみたいだからヴィータちゃんと言う通り一旦帰ろうか」

ライになのはと呼ばれた栗色の髪に白い服の少女は自身のデバイスから報告を受けると彼にそう返答した。

「じゃあそうしようか。ヴィータさんもそれでいいですよね」

「おう」

傍から見れば仲良し三人組だと思われそうだがこれでも三人ともれっきとした管理局員である。

しかもただの局員ではない。

まず、管理局の若きエース・高町なのは。彼女がPT事件や闇の書事件に深く関わっていて事件を解決したことはまだ日に新しい。

次に鉄槌の騎士・ヴィータ。彼女もやはり闇の書事件解決に尽力を

尽くした人物でなのはとは入局からずっとコンビをしている。

そして最後は地上本部の魔導師ルーキーことライラック・アヴィオールである。

この三人がいれば並大抵のことは問題解決してしまうだろう。

合同捜査任務が始まったばかりの頃も「異常事態があったら彼らに連絡を！」と言われるぐらいである。

そこまで彼らの期待は大きなものなのだ。

「じゃあ、私達は空から偵察しながら戻るからライラック君は地上をお願いね」

「分かりました…ってなのはさん、まだその呼び方ですか？」

「貴方が私のことを『なのは』って呼び捨てしてくれるまではね」

「はあああ……」

実はライ、まだなのはに『ライ』と呼ばれたことがないのだ。

何故そうなったかと言うとお互いに同じ年ながら『くさん』だの『くくん』だのを付けて名前を呼ぶからだそうだ。

まさに単純ながら複雑ですな。

「もういいです、好きに呼んで下さい。僕は行きますから」

「よろしくね」

「頼んだぞ、坊主」

「誰が坊主ですか!!」

ヴィータにからかわれながらもライはなのは達の前を後にした。

しかし、それがいけなかった――

三人が一瞬緩んだ為隙が生まれた。

そしてヤツはその隙を決して逃がしはしなかった。

――ザシュッ

雪が降り注いでいるので消音効果が発生しそれほど大きな音はしなかったが近くにいた三人にはその音だけで十分だった。

「えっ……?」

「…う……そ…」

「……!」

次の瞬間、その場にいなかったはずの何かになのはは刺されていたのだ。

しかも腹部をおもいつきり。

傷口からは血が流れ出し始め、白い雪は直ぐに赤い色へと染まっていた。

そして何かが彼女の身体から抜けるとその場へとなのはは倒れこんだのだった。

第4話「高町なのは」機動六課設立8年前・前編（後書き）

感想・意見お待ちしています。

後編はちよつとバトル入るのかな？

第5話「高町なのは」機動六課設立8年前・後編」（前書き）

初めての戦闘シーンです。

描写がうまく書けなかったり、終盤がなかなか納得する終わり方にならなかったのも仕上げるのに時間がかかってしまいました。

日に日にお気に入り登録件数も上昇しているので有難い限りです。
それではいよいよ始まります！！

第5話「高町なのは」機動六課設立8年前・後編

「なのはあああああああああああああ！！」

ヴィータが声を張り上げた。

つい先程まで元気な姿を見せていた少女は雪の上にめり込むような形で倒れた。

雪は更に赤さを増し、彼女の白いバリアジャケットも赤い染みが見え始めてきた。

「このやろおおおおおおおおお！！」

自身のデバイス、鉄の伯爵・グラーフアイゼンでヴィータは見えない何かにその怒りの鉄槌を下した。

——ズドオオオオオオオオオオオン！！

「うわっ!？」

ライは攻撃の衝撃波をもろに受けてしまったが何とか踏ん張った。

あまりの勢いに周囲には雪が舞い上がり、地面には大きなクレーターができた。

そしてその中心には機械か何かのようなものが煙を出して破壊されていた。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

息を切らしながら呼吸するヴィータ。するとすぐに倒れているなのはに彼女は駆け寄った。

「おい、なのは…なのは!!」

「…ヴィータ…ちゃん」

「しっかりしろ!! 医療班を呼んでやるから!!」

「ぐ……めんね……ちよつと……油断しちゃつ……た」

「わかったから、それ以上喋るな!!」

意識が朦朧とする中、なのはは自分よりヴィータの心配をするのだった。

なのはが刺されてしまったことによってヴィータは頭に血が上ってしまい今や冷静な判断をできる状態ではなかった。

「ヴィータさん!!」

「ライ!! 本隊の医療班をすぐ呼んでくれ。じゃないとなのはが……なのはが!!」

「今先程応援を要請したのでじきに到着すると思います」

なんと異常事態が発生してからライはすぐさまに部隊本隊に医療班の手配と応援要請をしていたのだ。

しかし――

「ですが、彼らは待っていてはくれないみたいですね」

「……!!」

そう彼に言われ涙を拭って周りを見ると辺り一面には見たことのない機械人形らしきものがうじゃうじゃといたのだ。

しかも三人を囲むような形なので当然、逃げ場などないのである。

「こいつら……検索していた未確認体か!!」
アンノウン

「でしょうね。どうやら目撃者である僕達の事を消しに来たみたいですよ」

今回の合同捜査の目的――様々な管理世界で目撃されていた未確認体の調査

まさにその未確認体の正体がどうやらこの機械人形達のようなのだ。

人形といっても縦長や丸、多脚型など大きさや形も別々で人形のような姿をしているのはひとつもなかった。

「アイゼン！！こいつら…「待って下さい」なに！？」

ヴィータがグラフアイゼンでその機械人形に襲い掛かろうとした瞬間、ライは彼女に待ったをかけた。

「ヴィータさんはなのはさんを守って下さい。二人で戦ってしまったら誰が彼女を守るんですか？」

「じゃあ！！お前一人でこれだけの数を相手にするのか！？」

たしかに彼女の言う通り機械人形の数は半端ではない。10や20ではなく100単位の数である。

「大丈夫ですよ。僕は一人じゃないですから」

『そうですね主。貴方は一人ではありませんよ』

「へっ？」

ライの意味不明な言葉に疑問を抱くヴィータであったが突如として彼の後ろに姿を現した女性に驚く。

「ブリュンヒルデ、いけるよね？」

『何をいまさら。久々ですけどね』

「アルビレオ、君も力を貸してくれ」

『勿論ですライ』

ライの期待に応えるように力強く返事をするアルビレオ。

そして――

「『ユニゾン……イン!!』」

次の瞬間、強い魔力の風が吹き荒れた。

「うわっ!!」

先程とはうって変わってヴィータがなのはを守るような形で風圧に耐えていた。

徐々に風が治まっていき姿を現したのは黒髪に金色の瞳、黒地に青いラインが入ったスエットシャツ、白のロングパンツで周りにスカ

ートカバーを付け青い甲冑を纏い右手にはオクスタンモードのアルビレオを持ったライであった。

「お前：陸戦なのに空も飛べたんかよ。しかも融合騎持ちだったのか」

「ヴィータさん、詳しいことは後で。それよりなのはさんの護衛、お願いします」

「…ああ」

変わりに変わったライの姿を見て呆気にとられてしまったヴィータになのはを任せライはアルビレオをかまえた。

「いくぞ!!」



「うおおおおおおおおおお！！」

アルビレオから放つ魔力弾で次々に機械人形を打ち落としていくらしい。

高速で移動しながらの攻撃であるが一体、また一体と確実に敵を打ち落としていた。

「オクスタンランチャー！！」

周囲に数十個にも及ぶ魔力弾を生成し撃ち放つ姿はまさしく狙撃主^{スナイパー}であった。

「アイゼン！！」

『シュワルベフリーゲン』

こちらにも負けじとなのはに襲い掛かってくる機械人形を片っ端から破壊していくヴィータ。

その姿はまさしく鬼神のごとくであった。

「アルビレオ、カートリッジロード!!」

『カートリッジロード』

「ハウリング……ランチャアアアア!!」

機械人形が固まったところに巨大な魔力砲を放つライ。その威力はなのはのディバインバスターと互角いやそれ以上かもしれない。

数分でもかなりの数を倒したがそれでも機械人形の数はまだかなりいた。

ヴィータもなのはを守りながら奮闘はしているものの、踏ん張りきれぬのも時間の問題だった。

「こいつらやたらとなのはを狙ってやがる」

「くっ!!もしかしたらなのはさんの強い魔力に引き寄せられてるのかもしれない」

ヴィータと合流したライは未確認体が襲ってくる理由を推測だが導き出した。

確かに今までの事件も魔力値が強力な人物が中心に狙われていた。

集中砲火のごとく襲い掛かってくる未確認体。

そんな数多くを全て防ぎきれはらずもなく遂に二人は何体かを取り逃がしてしまった。

「しまった!!」

なのはに迫る未確認体——ヴィータが声を上げるが絶体絶命であった。

「ユニゾンアウト!!」

『主!!』

「ライ!!」

瞬間、ライはブリュンヒルデとのユニゾンを解除し彼女彼らの声も無視して禁術を使った。

——ゴスツ、ズプツ、ザシユ、ザクツ

「……!!」

目の前の光景に驚くヴィータ。

間に合わないと思われたのだがライはどうゆうわけか機械人形達となのは達の間に入り込んで間一髪というところで攻撃を受け止めたのだ。

しかし、攻撃を受けたライからは血が流れ出し始めていた。

「…………ごふっ…IS……」
フリージア・フェアリー
『電子の妖精達』…」

刹那、機械人形達が一斉に爆発をした。ヴィータも何が起こったのか分かっていないようだが残っていた全ての機械人形が消滅した。

——
バサッ

消滅するのとはほぼ同時にライはその場に倒れこんだ。

倒れてしまったのは身体全身を刺されてしまい尚且つ破壊したときの衝撃もモロに受けてしまったので実際なのは以上に瀕死状態だった。

アルビレオも攻撃を受けるときにガードで使用した為、大破しきいつていた。

『主！！しっかりして下さい主！！』

ブリュンヒルデが涙ながら駆け寄ってライのことを呼んでいるがまったく反応がなかった。

「おいライ！！なのはが助かってもお前が助かないんじゃないやどうしようもないぞおおおお！！」

ヴィータもライの身体を揺するがそれでも反応がなかった。

その後、応援部隊が到着するやいなやなのはとライの治療が始まった。

なのはそれほど傷が深いというわけではなかったので応急処置が終わってすぐさま本局の病院へ送られたがライは状況が状況だけに慎重に処置が施されがそれから数日、数週間、数ヶ月と経っても目を開けることはなかった……

第5話「高町なのは」機動六課設立8年前・後編（後書き）

気がつくとも無茶苦茶長い話になっていました……
うまく描写が書けてましたかね？

感想・意見お待ちしています！！

第6話「アイリス・ブリュンヒルデ」機動六課設立5年前（前書き）

夜な夜な眠たい中、執筆してしまった話なので何処か噛み合わない文章が出てくるかもしれませんが目をつぶって読んで頂ければ幸いです。

プロット予定外の話ってのありますが（笑）

第6話「アイリス・ブリュンヒルデ」機動六課設立5年前

新暦70年

あの未確認体による管理局員襲撃事件から早いものでもう3年もの歳月が経過していた。

ほとんどの局員は数ヶ月で回復をし、自らの職場へと戻っていった。

また、中には重傷によって1年近くリハビリ生活を余儀なくされた局員もいた。

その内の一人であった高町なのはも過酷なりハビリ生活を耐え抜き、現在では念願であった教導隊入りを果たしている。

誰もが以前と変わらない生活を送っている――

だが実際には目を覚ましていない……3年も経った今でさえ入院したままの人物がたった一人だけいるのであった。



【時空管理局本局・医療センター特別治療室】

とある一室、金髪が美しい女性が窓際に置いてある花瓶に新しい花を生けていた。

その手つきは慣れているのか無駄がない動きで花の色の出し方もとてとても上手であった。

「主、今日は新しい花が手に入りましたよ」

しかし、彼女がベッドで眠っている人物に声を掛けるものの返事は返って来なかった。

短い銀髪が女性を思わせるのだが顔つきからは明らかに男性であることが分かる。

「あの日からちょうど今日で3年……貴方は何時まで私を待たせるのですか？」

花を生け終えた女性はそのまま近くにあった椅子に座り、ベッドで眠ったままの男性にそう語りかけた。

眠っている人物の名前はライラック・アヴィオール。

そして目覚めを今かと待ち続ける彼の融合騎、ブリュンヒルデ。

3年前の事件で高町なのはを守るために瀕死の重傷を負った地上本部の悲劇の新人である。
トラジディルキー

今までいくもの医師が彼を診療してきたが誰一人として彼を目覚めさせることは出来ていないのだ。

事件から数日後……地上本部でメカニックルームを任されているブリッツとマリエルが見舞いにやって来た時のことだった。

そのときに彼がはいた言葉をブリュンヒルデは忘れられなかった。

「あれ程ISを使うなと俺は忠告したのに！！コイツの今の身体じゃ能力に耐え切れるはずがない！！」か……」

ライが生まれながらにして持っている能力————IS『電子の妖^{フリージア}精^{フェアリー}達』

自分の周囲に存在するありとあらゆる機械を自らの制御下にすることの出来る能力で、実際は微弱な電気によって対象の内部から操作するような感覚である。

今回の事件ではその操作によって機械人形を内部から暴走させて爆発に追い込んだのである。

しかし、この能力にも弱点がありそれは全ての機械を対象としてしまうため味方にも被害が出てしまうことだ。

本来なら対象を指定して操作できるのだがライにはその経験が圧倒

的に不足していた。

それとこの能力発動中は身体を動かすことが出来ない為、常に無防備状態になるのだ。なので今回、爆発の衝撃をもろに受けてしまったのだ。

強力な能力だけにデメリットも多く存在するのでまさに諸刃の剣である。

（早く目を覚まして下さいよ……ライ）

そして手をぎゅっと握るブリュンヒルデの願いは涙と言う結晶になってライの顔にこぼれ落ちるのだった。



それから更に数ヶ月が経過した春先のある日――

「おはようございます……」

いつものようにライが眠っている病室に入ったブリュンヒルデがその日目にしたものの。

それはこの約3年、今まで目を覚ますことがなかった自らの主がベツドの上で起き上がっていたのだ。

「その声は……もしかしてブリュンヒルデかい？」

声を聞いてその人物の名前をすんなりと言い当てるライ。まさしくそれは彼女が今まで一番聞きたかった声であった。

「主
い
い
い
い
い
！」

病室であることを忘れて声を上げながらライに抱きつくブリュンヒ

ルデ。まさに感動の再会の瞬間であった。

「い、痛いよブリュンヒルデ。まだ身体感覚が戻ったばかりなんだからさ」

「あっ……その……すみません／＼／＼心配していたものですから」

急に顔を真っ赤にしてライから離れるブリュンヒルデ。自分でもはしやぎすぎたと自覚したのか少ししょんぼりであった。

「いいよ、別に。ブリュンヒルデがそれだけ僕のことを心配してくれていたってことでしょ？」

「はい!! そう……な……」

その言葉の続きは彼女の口からは出なかった。何故なら信じたくない、何かの間違いであってほしいという現実が目の前にあったのだ。

「でも残念だな。そんな君の顔を見ることが出来なくな……」

ライの微笑むような笑顔がそこにはあったが彼の瞳に光はなかった。

「どうやらあの爆発で視力を失ったみたいだ。微かにぼんやりとだけど見えなくはないかな？でも、生活するのは厳しいかも」

はははっと笑うライであったがそんなことが本心でないことぐらいブリュンヒルデには分かった。

もう何年も一緒に過ごしてきたのだから嘘の一つや二つ簡単に見抜けてしまうのだ。

「……大丈夫ですよ、主。私が――私がいいますから」

「ありがとう、ブリュンヒルデ」

「さ、身体に悪いですから今はゆっくりとお休み下さい。体力が回復したらリハビリが待ってますから。3年も身体を動かしていないのですから自由が利き辛いと思いますから」

「えっ、そんなに眠っていたの！？通りで身体が大きくなっているような気がしていたんだ」

「ふふっ……焦らずとも大丈夫です。時間はたっぷりとありますから」

「そうだね、アイリス…」

「ちょっ!?! その名前は恥ずかしいので呼ばないで下さい!」

「大丈夫! 今なら赤なっているだろう顔は見えないから」

「そう言う問題ではありません!」

真っ赤になってライの胸を叩くブリュンヒルデ。

だがライはそれを決して嫌がることはせず、全て受け止めていた。

主に助けが必要なら自分が助ければいいだけ――別に大きな問題ではないのだから。

そう自分に言い聞かせるようにしてライから離れたブリュンヒルデは今ほどとは違って変わって微笑みをこぼしながら病室の窓から外の青空を仰いだ。

そして外の太陽はまるで二人を見守るかのように煌々と輝いていた。

第6話「アイリス・ブリュンヒルデ」機動六課設立5年前（後書き）

感想・ご意見お待ちしております。

第7話「オックス・ペルゼフォネ」機動六課設立4年前（前書き）

ぐだぐだな内容ですみません……

だいぶズレてきてしまったかも（いろんな意味で）

第7話「オックス・ペルゼフォネ」機動六課設立4年前

新暦71年

ライが目覚めてからというもの、彼の回復力には驚くべきものがあった。

確かに戦闘機人という分類になるかもしれないがそれでも素体は人間、負傷すれば治癒にはそれなりの時間がかかるものだ。

身体の傷は目覚めるまでの約三年で大方直り、低下していた体力・視力も以前とほぼ同じまで戻って人並みに生活ができるようになった。

しかし、それでも車椅子生活など不便なことは多くあるのでブリュンヒルデが付きつきりで看病？（そう言うのか分からないが）したりしている。

それから数週間後、ライは無事に病院を退院するのであった。

※――※――※――※――

【地上本部・首都防衛隊隊員寮ライ自室】

退院したライは一先ず本局からミッドチルダにある首都防衛隊隊員寮まで戻ってきた。

夕方という事もあり仕事上がりの先輩や同僚に会い、もみくちゃにされたがその暖かさはライにとってとても嬉しいことだった。

――まだ自分には居場所があるんだ

そう感じるのに彼にはそれだけで十分だった。

夕食のようじゃない夕食を食べ終えて（どのような状況だったのかはご想像にお任せします）部屋に戻ってから暫くして……

コン、コン――

ブリュンヒルデと食後のコーヒーを飲んでいると部屋の扉を叩く音がした。

「ん？」

「私が出ましょう、ライ」

「お願いねアイリス」

白いワンピースのような私服をなびかせながら彼女は扉へと向かった。

ちなみに今は二人っきりなので互いに親しい呼び方である。

「主、部隊長がお見えです」

「二人とも休みのところ悪いな」

ブリュンヒルデに連れられ部屋に入って来たのはライの所属する部隊の部隊長だった。

昼間に一旦、ライは職場に顔を出していてその際に姿が見えなかったのだがどうやら退院したのを聞いて駆けつけてくれたようだ。

「いいえ、お構いなく。それで隊長？どうしたんですか」

「いや実はな。ちょうど本局からお前さん宛てに今日、通知が来ていたから渡そうとおもってな」

「わざわざありがとうございます。ブリュンヒルデ、隊長にもコーヒーを出してあげて」

「分かりました」

「いやゝすまんな」

そしてライは部隊長から通知を受け取った。

茶封筒には『取扱注意』と『速達』の赤印が押されていた。

「差出人は……時空管理局本局・武装隊!？」

差出人を見て驚きを隠せないライ。

それもそのはず、彼の夢は武装隊に入隊することであつたからである。

興奮を抑えながらもライは丁寧に封筒を開け、中に入っていた一通の手紙を広げた。

そこには――

【地上本部首都防衛隊・第41部隊所属 ライラック・アヴィオール殿】

この度、時空管理局本局・武装隊の定例委員会において次期入隊者の検討会を開催しその結果、
貴殿を新人武装隊員として我が部隊に招き入りたい。

については所属箇所からの異動に伴う説明もあるので近々、直接会って話をしたいと思う。

この通達が手元に届いたならば早急に武装隊・人事部まで日程を連絡をされたし。以上

Ⅱ 本局武装隊・人事部長 オックス・ペルゼフォネⅡ

「……」

「……」

「……」

開いた口が塞がらないとはまさにこの事だろう。

三人揃ってあまりのことに言葉が出なかった。いや、出すことが出来なかった。

あまりにも突然すぎる武装隊への勧誘――

嬉しいことこの上ない事なのだがライの表情は険しかった。

「隊長、俺はま「いいんじゃないか？」…えっ!？」

「お前さんの夢が叶ったんじゃないか。入隊したときからそればかり口にしていたしょ」

「でも……」

「でももへちまもあるか!! 折角のチャンスなんだから棒に振るんじゃないぞ!!」

捨て台詞的に言い放つと部隊長はコーヒーを一気飲みして立ち上がった。

「あ、ありがとうございます!!」

「ふん!!」

そうして彼は部屋を後にした。

部屋に残ったライはただ部隊長に頭を下げるばかりであった。



【時空管理局本局・武装隊人事部会議室】

3日後、ライは差出人であるオックス・ペルゼフォネを訪ねて本局に赴いていた。

車椅子での異動の為、随分と時間が掛かったり周りからの視線が少しばかり痛かったがそんなことは今の彼には関係なかった。

憧れの武装隊入隊――

しかし先日起こったある事件をきっかけにライの内心では変化が起きていた。

（本当に今の自分が武装隊に入って役に立つのだろうか？）

そんな考えをしていると会議室の扉が開き、武装隊の制服を見事に着こなした人物が入ってきた。

「お待たせして悪かったね。私が本局武装隊で人事部長をしているオックスだ。宜しく」

「い。いいえ！！地上本部首都防衛隊・第41部隊所属ライラック・アヴィオールです！！こちらこそ本日は宜しく願います」

「ふふっ、そんなに硬くならなくて結構だよ。別に難しい話をするわけではないのだから」

そう言ってオックスはソファに腰掛けた。

「さて、先日連絡を貰ったが……アレは本気かね？」

「はい。今のままでは自分は武装隊に相応しくないと考えたのです。だからどうしても!」

「分かった、君の意見を尊重しよう。私の方からも一応連絡を入れておくが本気なのだな？」

凄みを見せるオックスにライは首を立てに振った。それを見てかオックスも表情を和らげる。

「……ふう、君みたいな隊員は初めてだよ。それじゃ十二分に頑張っ
て来いよ!」

「はい!!」

こうしてある条件と引換えにライは本局武装隊へ正式に入隊することとなったのだ。

第7話「オックス・ペルゼフォネ」機動六課設立4年前（後書き）

感想・意見お待ちしております。

第8話「ユ一ノ・スクライア」機動六課設立4年前（前書き）

最近、帰宅するのが日付変更直前が多くまともに執筆出来ていない作者です。

何だか微妙な作品に仕上がりがつつある状況をなんとか打破せねば！

第8話「ユーノ・スクライア」機動六課設立4年前

【時空管理局本局・無限書庫】

「で、やって来ました無限書庫!!」

「な、何だか普段とは違うね？」

「ユーノ、分かってあげて下さい。主は今まで溜まりに溜まっていたものが爆発してしまったのですから」

「そうなんだ。ゴメンよ、ライ」

「二人揃ってそんな哀れむような目で俺を見るなああああああああああ
ああ!!」

何故、ライが無限書庫にいるかと言うと話は戻って武装隊入隊条件である。

オックスに言っていた『ある条件』とは今後一年間、ライが無限書庫にて知識を深めることである。

なにぶん数年も眠っていた為、意外と近年の魔法技術・知識を理解し切れていないのだ。

そんな状態で武装隊に入隊することなど自分自身で許せないライはそんな知識を深める手段として昔からの親友で現在は無限書庫で司書長をしているユーノ・スクライアに武装隊経由で無理を承知で頼み込んだのだ。

案外、難しいと思われた無限書庫での長期にわたる任務だったが、ユーノの知人ということもありあっさりと承認された。

そして現在、ライはブリュンヒルデと共にユーノの元に赴いていたのだった。

※

※

※

※

「基本的に僕は他の仕事でいっぱいだからなかなか様子を見てあげられないけど大丈夫？」

「大丈夫だよユーノ。俺だって検索魔法はそれなりに使えるし、ブリュンヒルデもいるから」

「主の言う通りですユーノ。ですから貴方は自分の仕事をこなして下さい」

「分からないこととかあればその時に聞くからさ」

「分かった。じゃ、何かあったら呼んでね」

「あいよ」

会話が終わるとユーノは早速近くに浮いていたファイルを掴むところの巨大な空間の中に消えていった。

無限書庫はあまりの広さ、無尽蔵の書物のせいで本当に欲しい情報

が簡単には手に入らないのだ。

なので本来ならチームを編成して検索作業を行うのだが時折、ユーノのようにそういった検索関係の魔法が秀でている人物がこの無限書庫に現れるのだ。

まあ、それを言うとならイもその秀でた人物の一人ではあるのだが……

「さて、まずはこの三年近くに起きた管理局や魔法世界関係の情報だな」

「そうですね。早速探してみましよう」

「それぐらいなら簡単に見つかる……よな？」

「主！！何故、疑問系なのですか！？私より遥かに検索能力は優れているではありませんか」

「気のせいだよ、気のせい……」

「はあ、取りあえず探してみますか」

何だか分からない会話で疲れを見せてしまったブリュンヒルデでは

あったが、何だかんだやるときはやるしっかりものである。

※※※※

【4時間後】

疲れきった顔を見せるブリュンヒルデと検索魔法のおかげで優雅な顔つきでいるライ。

彼の元に戻ってきたブリュンヒルデが殺気を放つもののライは冷や汗を少し掻く程度で知らんぷりだった。

「探してみましたが殆どがこのような情報ばかりですね」

「うーん、大した情報はなかった…っ」と

「ですが最近のもので非常に気になるものが」

そういつてライの前にモニターを出して記事を見せるブリュンヒルデ。

その記事の内容とはミッドチルダ臨海第8空港火災についてだった。

ミッドチルダ臨海第8空港火災――――

先日起こった爆発火災でユーノの友人である高町なのはやフェイト・T・ハラオウン、八神はやて達が人命救助・消火活動に大きく貢献した事件である。

この事件をさかえに彼女達の意識が大きく変わり、それを実行に移すまでにはもう少し先の話である。

「そうか、彼女はまた空を飛ぶことができたんだ」

その記事を読んで4年前の事件を思い出すライ。

自分は未だに完治していないが彼女が既に活躍をしていることを知ってその顔には安堵の表情が浮かんでいた。

「それと……壊れてしまったアルビレオの代わりも考えなくてはなりませんしね」

「ああ」

なのはをそしてライを守るために残念ながら修復不可能までに碎け散ってしまったアルビレオ。

そのため現在、彼にはデバイスがない状態ではあるが簡単に新しいのを作るけではないけない。

しっかりとアルビレオの魂を受け継いだデバイスでなくてはいいけないのだ。

「作るときはブリッツとマリエルにお願いしなきゃね。お見舞いのお礼もかねて」

「そうですね。きっと快く受けてくれると思いますよ」

「実は名前だけ決まってるんだ。新しいデバイスの」

「そうなんですか？」

「アルカディア（理想郷）——自分の目指す夢に突き進み続ける気持ちを含めた名前」

「きっと主が思っているようなデバイスになりますよ」

そんなこんなあったがライはブリュンヒルデと共にこれから一年近く、無限書庫で知識・情報を集めるのだった。

同時進行でリハビリも順調に進み、その頃には車椅子など必要なくなっていた。

武装隊にも戻り、一管理局員として各世界を回りながらライは着実に力を身に付けて行くのだった。

そして物語は時が過ぎ新暦74年――

機動六課設立まであと1年と迫っていた。

時空管理局本局 局員I D

【新暦71年10月1日 更新】

名前…ライラック・アヴィオール

所属…時空管理局本局・無限書庫（武装隊より出向扱い）

役職／階級…無限書庫司書／空曹長

魔導師ランク…ミッドチルダ式／総合D＋（魔力回復中の為）

所有資格…検索能力S／情報処理S

保有武装…アイリス・ブリュンヒルデ（融合騎）

I S 『電子の妖精達』（現在封印中）

第8話「ユーノ・スクライア」機動六課設立4年前（後書き）

感想・ご意見お待ちしております。

第9話「八神はやって〜機動六課設立1年前・前編」 (前書き)

キャラクターの話し方、呼び方がバラバラですが新章開始時には統一したいと思います。

暫くは目でも瞑っていてくだされ。

第9話「八神はやて」機動六課設立1年前・前編

【新暦74年】

ライが目覚めてからはや4年――

当時14歳だった少年は若々しい18歳の青年へと成長し、容姿端麗と言えるまでの姿になっていた。

再び伸ばした銀髪はポニーテールのように縛られ駄々草だった前髪もきちんと整っている。

淡く青い瞳には何か決意のようなものが宿っているようにも感じられるきりつとした目つきだった。

バリアジャケットも自身の成長に合わせて新しくしたのか白と黒のツートンで肩に金色の装飾が施されている以外、傍から見れば何処かの学園の制服にしか見えないようなものだった。

しかし、羽織っている瞳と同じ色をしたマントコートがそれを見事に打ち消していた。

「今回の任務も無事終了。アル、報告用の記録宜しくね」

『承りました』

本日の任務を終えて右手に持っているアルこと自身のデバイス【アルカディア】と会話するライ。

話す言葉からも幼さが消え、どこか逞しくも聞こえるがそれはデバイスの方がフレンドリーだからかもしれない。

本来こんな仕様のはずではなかったのだが何処をどう間違えてしまったのか気がついたらこうなっていた。

始めは気になって仕方がなかったライだったが最近ではこれも慣れてきたようで特に文句も言わなくなった。

ちなみに、アルカディアの開発者である本局技術部のブリッツとマリエルがライから制裁を受けたのは今では彼らにとって思い出話のひとつであったりする。

「さて、帰りますかね。モニターを出して」

『はいはい!!』

アルカディアにそう言ってライの前にモニターが映し出された。そ

ここに姿を現したのはこれまでずっとライと同じ時間^{とき}を過ごしてきた彼の融合騎であり家族であるアイリス・ブリュンヒルデが映っていた。

「アイリス、今から帰還するから転送準備をお願い」

《お疲れ様です、ライ。直ぐに転送準備を行いますので暫くお待ち下さい》

そう言って一旦モニターを切るブリュンヒルデ。

数ヶ月前からお互いにブリュンヒルデ、主の呼び方を止め親しい方の呼び方を始めた。

これはライが提案したもので今ある融合騎といえども“家族”としての絆を深めたかったことにある。

無論、言い出した当初はブリュンヒルデが大いに反対したが自分だけが言っても言ってもアイリスと呼ばれ続けられていることに観念して彼の提案に従い始めたのだ。

なので今のこの呼び方はお互いの関係、主と融合騎という壁を見事に解決したのだった。

アイリスに連絡してから暫くするとライの足元に魔方陣が展開し始めた。

「アルもご苦労さん。モードリリース」

『スタンバイモードに移行します』

直後、右手に持っていたアルカディアはエメラルドグリーンの色をしたガントレットへと姿を変えた。

『座標確認OK、転送準備完了!!いつでも行けますよ!!』

「それでは……転送!!」

刹那、辺り一面に眩しい光が発生し徐々にそれが収まってくるとそこにライの姿はなかった。



【??:??】

「ただいま」

『皆さ〜ん!!
【銀色の死神】
がお帰りになりましたよ〜』

「アル！！その呼び名はやめろって言っただろう！！」

『ええ！！そんな話……聞いてないし』

「何だその間は！！明らかにお前知ってるだろう！！」

？）だがこの職場では随分と見慣れた光景になっているようで局員

達は特に止めるような様子もせず普段通りに振舞っていた。

ところでアルカディアが先程から言っている『銀色の死神』とはライの二つ名的なものである。

デバイスの形状が鎌であること、特徴的な髪の色からそう言われ始めたのもここ最近の事だったりするのだが：

片や『エースオブエース』とか言われているの人物がいるのにも関わらず、この呼び方はいかなものだろうと本人は極端にこの二つ名が気に入らなかった。

「ふふっ、執務官とデバイスがケンカをするなんてこのお二人程度ですね」

「ギンガ：これを見ていてそう言えるのはお前ぐらいのものだ」

そんな姿の二人（やっぱり一人と一人？）を見ていたのかやってきた二人の女性が口々に言葉を発した。

陸士部隊独特の茶色の制服に紫色のストレートの髪を紺色のリボンで縛った姿が特徴のギンガ・ナカジマ陸曹と金髪に翡翠色の瞳をしたライの融合騎でかつ、彼の執務官補佐もしているアイリス・ブリュンヒルデだった。

ライは指揮官資格習得の為の実技訓練とある事件の捜査協力を含めて両方の条件を満たしていたこの部隊にマリエルの紹介もあって武装隊を辞めてからゲンヤ・ナカジマ陸上三佐が率いる陸士108部

隊でお世話になっていた。

捜査の傍ら執務官としての執務もあるため殆ど部隊にいないのだが。

「そういえばアヴィオール執務官、部隊長が呼びしていましたよ？」

「へっ！？ゲンヤさんが俺を？それとギンガ、俺の事はライでいいからな」

「はい。残念ですが公私はしっかりと分けたいので」

「ライ、また何か仕出かしたのですか？」

「何もしてないぞ、心当たりもないし。取りあえずゲンヤさんのところに行ってみるか」

「今の時間なら多分、部隊長室に居られると思いますよ」

「ありがとう、ギンガ」

「いいえ」

「アイリス、行くよ」

「はい」

「アル、さっきの話はまた後でな!!」

『ちえゝ、逃げ切れると思ったのにな』

早々にアルカディアとの言い争いを切り上げたライはブリュンヒルデを連れて部隊長室に向かった。

第9話「八神はやって〜機動六課設立1年前・前編」(後書き)

感想・ご意見お待ちしております。

第10話「八神はやて」機動六課設立1年前・後編（前書き）

取りあえず今回で過去編の話は終わりです。

次回からはいよいよ機動六課での話しに入ってきますので楽しみに！！

第10話「八神はやて」機動六課設立1年前・後編

【陸士108部隊・部隊長室】

ライが部隊長であるゲンヤから呼び出しがあったことをギンガから聞かされていた頃――

「研修中はほんまにお世話になりました。ゲンヤさんのおかげでウチも部隊がもうすぐ持てそうです」

「そりゃー良かった。譲ちゃんの力だったら上層部だってそう文句は言わんさ」

「まあ、他にも色々と支援して下さる方々がいるおかげですが」

「ははっ！！それは心強いな。ところで、アイツに用とはお前さんも珍しい奴を部隊に加えたがるな？」

「アヴィオール執務官の二つ名『銀色の死神』の名前はちよくちよく聞きますので」

「私もですうー!!」

「あゝ、前もって言うておくが本人の前でその名前は出すんじゃないやねえぞ。切り刻まれても俺ですら文句は言えんからな」

「そうですか、肝に銘じておきます」

「私もですう」

彼を待っている部隊長室では既に何やら話が進んでいるようだった。声からして三人いるようだが一人はそれ相応の年を重ねた男性、残りの二人はしっかりとした口調の女性と幼さが若干残っているような女性のようなようだ。

「まゝ今、ギンガにライの奴を呼びに行かせたからもう少し待っていてくれや。ほれ」

そう言い二人にこの世界では珍しく緑茶なるものを差し出すのは見た目50歳前半と思える部隊長のゲンヤ・ナカジマ三等陸佐。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

その緑茶を受け取るのは現在、特別捜査官の職務をこなす過去にゲンヤの元で研修もしていた八神はやて。

そして彼女の融合騎で大切な八神家の一員で約30cmと小さな身長ながらパワフル少女、リインフォース？（ツヴァイ）である。

※

※

※

※

——ピピピピピッ

ゲンヤ達がお茶をすすり始めて数分後、部隊長室に來客を知らせる電子音が響き渡った。

『ナカジマ部隊長、アヴィオール執務官及びブリュンヒルデ執務官補佐の両二名参りました』

「おう、やっと来たか。入れ入れ」

そう言って部隊長室の扉が開き、執務官服に身を包んだライとブリュンヒルデが入って来た。

「ライ、お前さんにお客さんだ。まずは話を聞いたってくれ」

「お初にお目に掛かりますアヴィオール執務官、ブリュンヒルデ執務官補佐。私は本局で特別捜査官をしています八神はやて言います。で、こっちは私の補佐をして貰っていますリインフォース？です」

「はじめましてなのです!!」

ゲンヤに紹介されて席を立ちライ達に向かって敬礼をするはやてと
リン。

「こちらこそはじめまして八神特別捜査官、リン特別捜査官補佐。
本局執務官のライラック・アヴィオールです。こちらが私の補佐で
…」

「アヴィオール執務官の執務官補佐をしていますアイリス・ブリュ
ンヒルデです。以後、お見知りおきを」

敬礼を終えて握手を求めるライにはやてはさっと手を差し出し硬い
握手を交わした。

（うわゝこの人、女の子みたいな手しとるなあ）

だが、頭の中はまったく違うことを考えているようだが。

ブリュンヒルデもリンと握手を交わし、互いに席へ腰を下ろした。

「それで、私に個人的なお話とは？」

直球ではやてに質問するライ。

彼にとって遠回しの話など時間の無駄であって答え次第でその後の話を聞か聞かないのか判断するのだ。

「そうですね、隠し事もなんですから素直にお話します。実は近々、私が設立する部隊に参加して頂きたいのです」

「ちなみに私の情報はどこから？」

「貴方の執務官補佐時代の指導者であり、私の個人的な友人でもあるフェイト・T・ハラOWN執務官です」

実はライ、執務官補佐時代に管理局きつての凄腕女性執務官フェイト・T・ハラOWNの元で執務官になる為の勉強をしていたのだ。

なので彼にとってフェイトは恩師であり、執務官として目指す目標でもあるのだ。

まさかそんな彼女とはやてが友人同士であったなんて思いもよらなかったのかブリュンヒルデと揃って思わず声を上げそうになった。まった。

「なるほど、フェイト執務官の紹介ですか。それではお断りすることもなかなか出来ませんね。あの人の顔に泥を塗ってしまうようなものですから」

「それじゃ：「しかし」：えっ？」

これで部隊への参加も決定したかと思ったはやてであったがライは待ったをかけた。

「私も今直ぐと言うのは無理があります。自分の仕事もありますし、部隊との合同捜査で解決していない事件もいくつかありますしね」

「『今直ぐは無理』と言うことは後日、参加して頂けるという解釈を私の中でも宜しいのでしょうか？」

「今はそう言うことでお願いします。八神特別捜査官」

「……わかりました。それではまた後日、正式に部隊への参加要請をさせて頂きます。アヴィオール執務官」

会話を終えるとはやては立ち上がり壁に掛けてあったコートを羽織り、部隊長室を後にしようとした。

「それではナカジマ三佐、私はこの辺で。今日はありがとうございます
ます」

「なに、お前さんも元気にやれよ。後スバルの事、宜しく頼む」

「はい。それじゃリイン、行こうか」

「はいですうゝ!!」

席を立て出て行くはやてを見送るライ。

そのすれ違い様、はやてはライに耳打ちするようにぼそつと言葉を
零した。

（――高町なのは一等空尉もこの部隊に参加するさかい、もう一度

よう考えてや)

「……!!」

直ぐに彼女の方を振り返るが既に部隊長室を後にしてしまっておりその姿はなかった。

「どうしたのですか、ライ」

「いや、なんでも…ない」

「…?」

普段とは少し違った雰囲気を出すライを不思議に思ったブリュンヒルデだったが特にそれ以上は話を突っ込まなかった。

しかしこの瞬間、今まで少しずつだった歯車の動きが大きく動き始めるようになりだすのだった。

（なのはの事は気になる。だが、執務官としての仕事は？ 合同捜査は？ どうすればいいんだ）

それから連日連夜、ライははやての一言に悩まされ続けるのだった。



「はやてちゃん。あの人、本当に六課に来るんですか？」

「リイン……」来る”んじゃないんや。”来ざる得ない”状況を私は作ったんや。絶対に彼はうちに来るで」

「うーん、はやてちゃんの言っていることは難しいです」

「ふふっ。リインもそのうち分かる様になるよ」

「そうですか？」

ライとの話を終え、部隊隊舎の外を歩くはやてとリインはそんな会話をしていた。

傍から聞くと何でもない話だが、知っている人物が聞くととんでもない話をはやてはしているのだ。簡単に解釈するところだ。

——高町なのはという”餌”でライラック・アヴィオールという人物を”釣って”自身の部隊に加える。

上層部も真っ青な顔になりかねない様な恐るべき方法ではやてはらいを部隊に何としてでも加えようとしているのだ。

（絶対に彼は来る。『あの事件』以降、なのはちゃんの事が気になるし）
って仕方がないのは裏では有名なことや。フェイトちゃんの件もあるし）

八神はやて――

やはり恐るべき人物は彼女であろう。ああ…はやて、恐ろしい子！！

「さてリイン、次の人物を尋ねに行こうか」

「はいですうゝ！！」

そうしてはやてとリインは次の部隊参加者を尋ねに目的地へと向かうのだった。

第10話「八神はやて」機動六課設立1年前・後編（後書き）

感想・ご意見お待ちしております。

登場人物設定（前書き）

どうも、作者のロードです。

【過去編】が終わりいよいよ本当の意味での本編がスタートです！！
と、言うことで今更ですが登場人物^{オリジナル}の紹介です。

登場人物設定

名前…ライラック・アヴィオール

CV…櫻井孝宏

出身世界…ミッドチルダ西部 エルセア

魔力光…白銀色

使用魔法体系…ミッドチルダ式

魔導師ランク…空戦及び総合S＋ランク

所属…時空管理局本局執務官

役職／階級…執務官／一等空尉

先天性技能…フリージアフエアリー電子の妖精達

デバイス…インテリジェントデバイス『アルカディア』

Ⅱ詳細Ⅱ

『プロジェクトR』の実験体の一人、タイプゼロ・プロトとして生まれた戦闘機人。

幼い頃からブリュンヒルデに鍛えられてきたため管理局入局後、若干11歳ながら当時の地上本部・首都防衛隊で若きエースと称されていた。

しかし、本局魔導師との合同捜査任務中にアンノウンの襲撃を受け瀕死となり、約3年近く昏睡状態に陥っていた。

昏睡から回復後は無限書庫にてリハビリを兼ねながら武装隊に一時期所属していた。

その後、武装隊を隊退し知人の紹介により陸士108部隊にて指揮官研修を受けている。

現在は執務官資格も習得し、管理局員の間では『銀色の死神』として名を馳せている。

Ⅱ能力評価Ⅱ

近接戦闘…SS、中距離戦闘…S 遠距離戦闘…AAA、魔力防御…
AAA、補助魔法…S
魔力制御…S、機動力…SSS、知力…SSS、判断力…S、体力…
AA、経験…SS

名前…アイリス・ブリュンヒルデ

CV…遠藤綾

出身世界…ミッドチルダ西部 エルセア

魔力光…真紅色

使用魔法体系…古代ベルカ式

魔導師ランク…空戦AA＋ランク

所属…時空管理局 陸上警備隊 陸士108部隊

役職／階級…執務官補佐／空曹長

デバイス…アームドデバイス『ガーディアン』

＝詳細＝

ライと共に人生を歩んできた家族でもあり彼の融合騎にて執務官補佐でもある。

なのはの『管理局の白い悪魔』に対してアイリスの二つ名は『管理局の赤い魔女』

（決してハーメ○ンの赤い魔女ではありませんwww）

本人は意外にもこの二つ名を気に入っていたりする。

ライの教育係であっただけに基礎能力は異常に高く、近接戦闘においては現在右に出るものはいない。

実は非常勤で航空戦技教導隊にて指導も行っていたりする。

|| 能力評価 ||

近接戦闘… S S S、中距離戦闘… A A + 遠距離戦闘… B、魔力防
御… S S +、補助魔法… S S S
魔力制御… A A +、機動力… S S S、知力… A、判断力… A、体力…
S、経験… A A A

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4784q/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 過去と現在(いま)と未来と…

2011年3月5日20時34分発行